イスラエル側、自分たちの痛みだけを増幅

——作家、エトガル・ケレットさん

朝日新聞二〇二四年四月一八日朝刊

イスラエル軍が攻撃を続けるパレスチナ自治区ガザで、半年間の戦闘の死者が３万３千人を超えた。ただ、イスラエル側でその悲惨な現状に強い関心を持つ人たちは少ない。なぜなのか。イスラエルを代表する作家エトガル・ケレットさんは、多くの人たちが、自分の痛み以外を気にしない「選択的共感」の世界に陥っているからだ、という。

——昨年１０月７日、イスラム組織ハマスがイスラエルを越境攻撃し、１２００人の犠牲者が出た。どのようにして知ったか。

朝６時半ごろ、サイレンの音で目が覚めた。まもなくとんでもないことが起きているのでは、と気づいた。政府などから「何が起きているのか」についての説明が一向に始まらなかったからだ。

テレビニュースをつけると、ハマスから攻撃され、身を守るために隠れている人と電話がつながっていて、「外で飼い犬が撃たれた」「助けてくれ」と訴えていた。応答がなくなると、その人が殺されたのだと分かる。あの日、多くのイスラエル人が「襲われている人の視点」で一部始終を目撃した。

今、イスラエルの人々の語りや行動は賢明でも理性的でもない。まるで自分が大虐殺の渦中にいるかのような経験をしたことが、トラウマ（心の傷）になっているからだろう。

——これまでの攻撃や戦争とは違ったか。

イスラエル人を殺そうとしている組織があることも、ときに攻撃で民間人が犠牲になることも、私たちには新しいことではない。　ただ、市民が「自分たちが標的にされている」という危機感をここまで

Etgar Keret 1967 年、テルアビブ生まれ。小説のほか、映画の脚本も手がける。日本語訳された作品に「突然ノックの音が」「銀河の果ての落とし穴」などがある。両親は、ホロコースト（ユダヤ人大虐殺）の生存者。

抱いたことはなかった。

――どう捉えたか。

私は作家であるせいか、「その中」に吸い込まれることはなかった。体験していることだけではなく、その「語られ方」について、常に考えているからだ。

１０月７日にイスラエルで起きたことを見て、涙を流さず、犯人を裁くよう求めない人がいるとすれば、私は理解できない。

ただ同時に、ガザで起きたことを見て、そこに生きる人々に共感せず「こういうことが起きたのは彼らの問題だ」などと言う人も、私は同様に理解できない。

飢えに苦しむガザの多くの市民は攻撃にはかかわっていない。ガザの人々の基本的な権利は尊重されなければならない。

――あなたの意見は、イスラエルでは少数派だ。

イスラエルの多くの人々に他者に共感する能力が欠けている点は、国際的にも批判を浴びている。ただ、イスラエル人を「狂っている」と批判する意見の中にも、「狂っている」と言わざるをえないものがある。

地域の歴史も、ハマスがどのような組織なのかも知らず、感情にまかせた「物語」が飛び交っている。

私は「選択的共感」と呼んでいる。自分や自分がくみする側の痛みだけを増幅し、そうではない側の痛みを無視する状況だ。

――どういうことか。

相手側の痛みをなかったことにして、自分の気分をよくしようとしているのだ。ＳＮＳ上の議論でよく見られる。現実の複雑性を認めるところからしか、意味ある議論を始めることはできない。

――イスラエルの人々が「選択的共感」に陥る背景の一つに、徴兵制があるという意見も聞く。

影響はあるだろう。だが、そうならない道を選ぶこともできるはずだ。

イスラエル軍は、いわば「国民の軍隊」だ。イスラエルは専門的な軍隊を持つには国が小さすぎる。米国のように十分な資金もインフラもない。できるだけ多くの国民が兵士になれる仕組みが必要なのが現実だ。

ただ、兵役を終えて制服を脱いだら、政府の方針や軍事行動に反対するデモに参加できる自由もある。

私はイスラエルの人たちが「選択的共感」の世界からなんとか抜け出せることを希望として持っているし、それがこの国が民主主義の国であることを示す道だと思う。（聞き手・高久潤＝テルアビブ）